

2015/8/22 京都大学E.FORUM

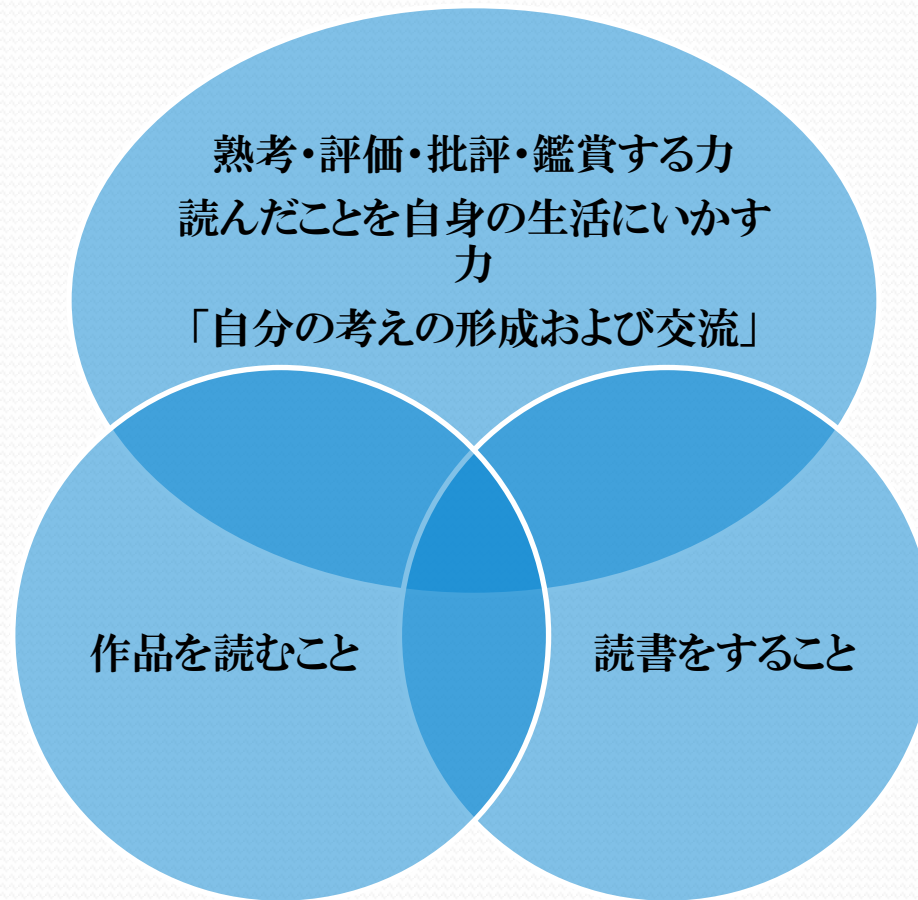
国語科 スタンダード改訂に向けて

八田幸恵(大阪教育大学)

2013年度版スタンダードの成果

熟考・評価・批評・鑑賞する力の育成

作品を読むことと読書をすることの統合を目指して



読むことの指導論・目標論の展開

価値目標と技能目標の二元論から認識目標へ

戦前

- ・「知徳ヲ啓発スル」教科
- ・教養・思想・人格的な側面(作品の内容による教化・感化等)重視

戦後新教育

- ・コア・カリキュラムにおける用具教科
- ・手紙の書き方、議論の仕方といった社会生活において機能する技能目標が重視

1950年代

- ・戦後新教育批判 民族の遺産としての言語を通じた人格形成を
- ・読む・書く・話す・聞くといった主体の言語行動そのものが人格形成の機能を持つという反論

1970年代

- ・価値目標と技能目標の二元論を超えて、言語による認識能力を発達させ、人格形成にまで高める

読むことの指導論・目標論の展開

田近洵一(1984)による国語科教育目標構造化

		認知的能力			情意的能力	運動的能力
		知覚・想像・思考	表現	鑑賞・評価		
読む	生活言語					
	文学言語					
	論理言語					
書く	生活言語					
	文学言語					
	論理言語					

田近洵一「国語学力の構造と目標分析」全国大学国語教育学会『国語科評価論と実践の課題』明治図書、1984年より発表者作成

読むことの指導論・目標論の展開

作者が用いた認識方法から読者が用いる理解方略へ

1980年代

- 作者が作品に埋め込んだ認識方法を取り出して系統化する
- 「対比」「分析・総合」「順序」「理由・原因・根拠」「条件・仮定」……

1980年代

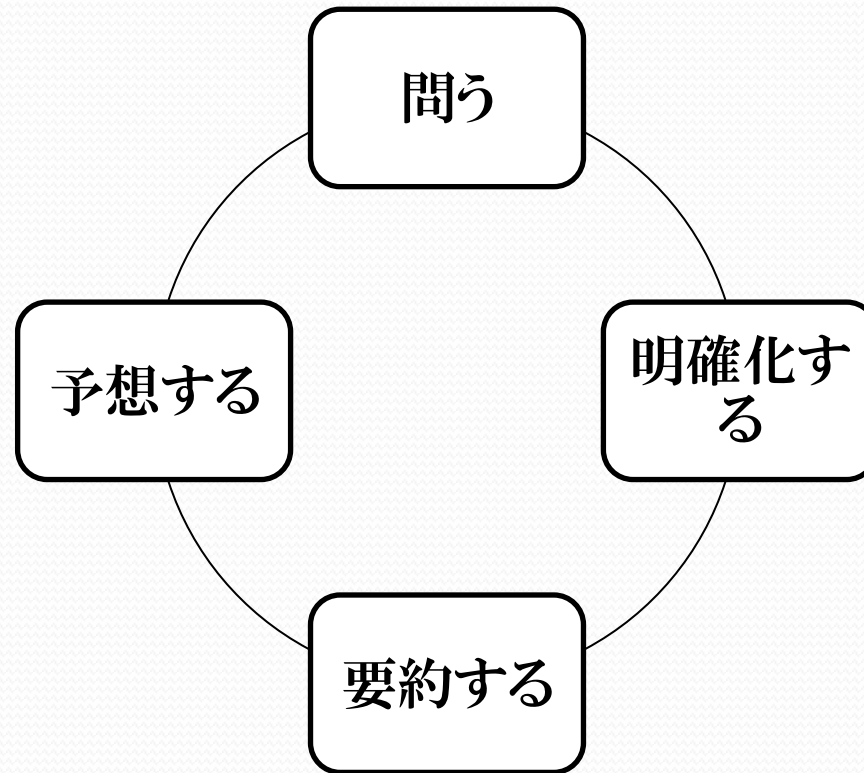
- 子どもたちの主体的で自然な読みを
- 認識目標に情意的なニュアンスを

1990年代以降

- 構成主義の読み観の確立
- 主体的な読みの過程を分節化した理解方略の指導

読むことの指導論・目標論の展開

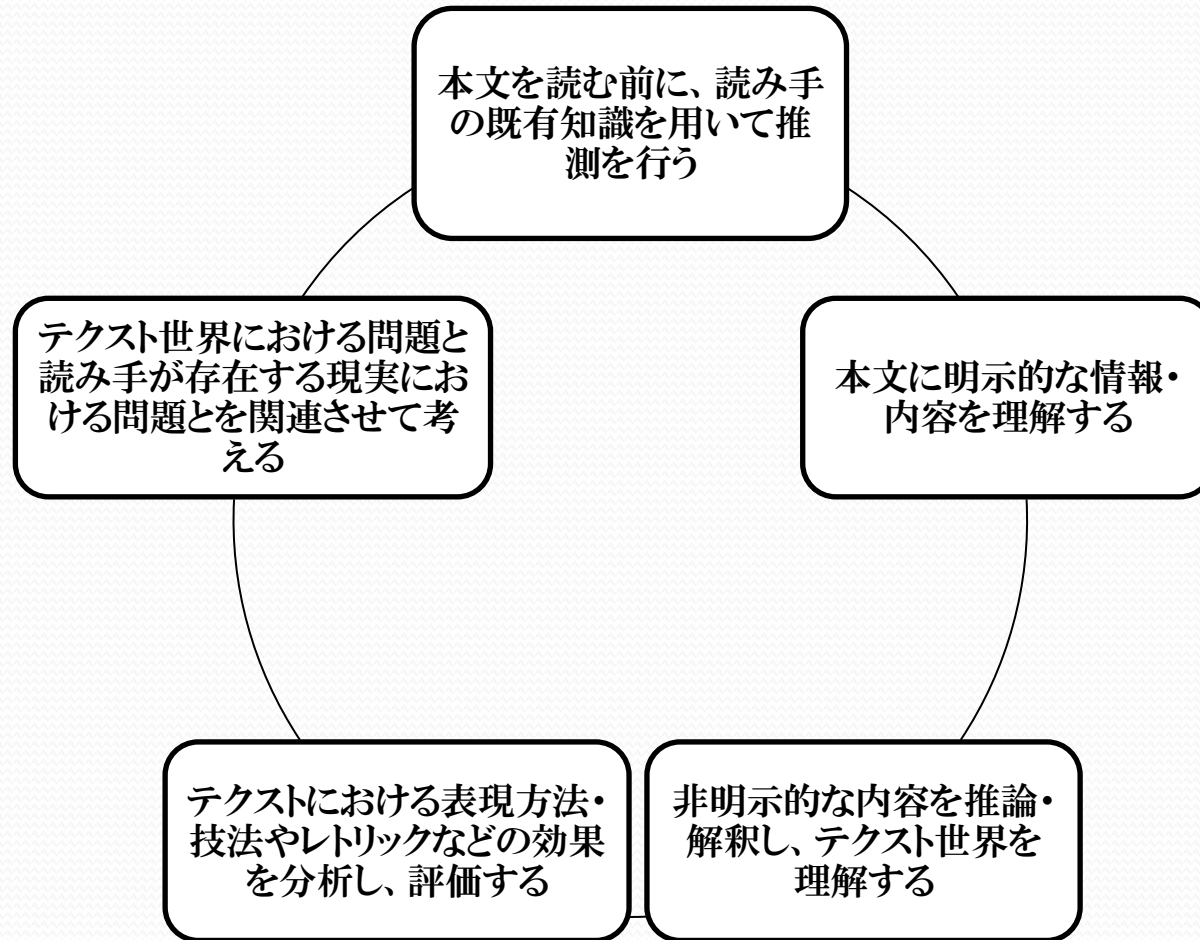
理解方略 「相互教授」の場合



A. S. Palincsar and A. L. Brown. Reciprocal teaching of comprehension-fostering and comprehension-monitoring activities. *Cognition and Instruction*, 1(2), 1984, pp.117-175.より発表者作成

読むことの指導論・目標論の展開

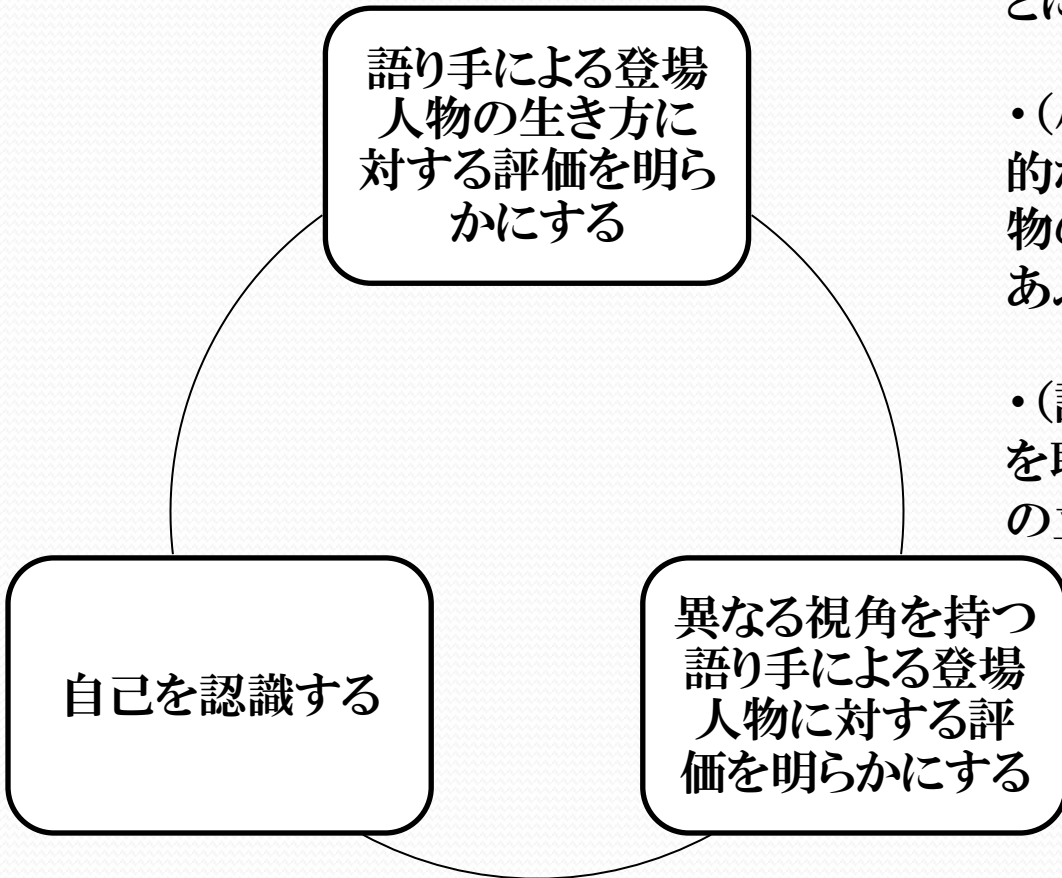
理解方略 広島大学国語学力研究グループの場合



広島大学国語学力研究グループ『高校国語科 高次読解力評価のためのハンドブック』より発表者作成

読むことの指導論・目標論の展開

理解方略 八田幸恵の場合



○多様な視角からの評価を参照によることによる自己認識

・(小説)登場人物の生き方に対する多角的な相互評価を読み解くことで、登場人物の生き方に対する自分自身の評価をあぶりだし、自己を認識する。

・(評論文)同テーマに対して異なる立場を取る複数の論者の文章を読み、自己の立場を認識し、確立する。

2015年度改訂スタンダードの方針

- スタンダードの記述方法を、必ずしも永続的理解のかたちではなく、パフォーマンスのかたちで記述する。課題に関しては、その課題によって「評価」「批評」「鑑賞」といった理解まで含む、主体的・包括的な読みのパフォーマンスが成立するかどうかという視点から選定する。
- 第二に、理解方略はあくまで組み合わせられて発達していくため、理解方略ごとに発達の水準を記述するのではなく、複数の理解方略を用いた読みのパフォーマンスが総体としてどう育つのかを記述する。
- 多角的な思考を重視する。

⇒作品を読んで理解することと読書をして自己を確立することの統合を！！